関西国際大学研究紀要
第6号,2005年,111～122

「自己投入」について

－自尊感情，発達段階との関連－

Commitment as A Function of Identity Formation

荒　井　真太郎*
Shintaro ARAI

抄　録

本研究は，自己投入尺度を作成し，自尊感情との関連からその構成概念について検討を行うこと，さらに，青年期から成人期の発達的特徴を捉えることを目的とする。自己投入尺度，自尊感情尺度，家族をめぐる葛藤の認知に関する質問紙を青年110名と成人71名に実施した。主な結果は次の通りである。①自己投入と自尊感情の関連の仕方における男女の特徴が明らかとなった。②青年期において自尊感情と家族をめぐる葛藤の認知との関連が明らかになったが，成人期には，有意な関連が認められなかった。

1．問題と目的

1．1　自己投入の概念について

自我同一性の獲得に関して，実証的研究として数多くの質問紙や面接法による測定が行われてきた。Marcia[1)]の自我同一性地位という概念に従って，自我同一性地位判定のための半構造化面接が開発され，質問紙としても自我同一性地位判定尺度[2)]が作成された。自我同一性地位判定尺度は，自我同一性研究においてしばしば用いられてきたが，それは，「現在の自己投入」，「過去の危機」，「将来の自己投入の希求」という3つの下位尺度の得点によって自動的に6つの自我同一性地位に判別されるという簡便性によるところが大きい。しかし，自我同一性地位判定尺度の実施上の問題点としては，「同一性達成－早期完了中間地位」「同一性拡散－モラトリアム中間地位」という定義が曖昧である地位に判定される割合が大きいことがある。また，自我同一性地位判定尺度の下位尺度を独立して取り上げて分析を行った研究[3)]もある。本研究では，これらの下位尺度のうちで「現在の自己投入（あるいは「傾倒」，「コミットメント」）「将来の自己投入の希求」という側面について取り上げたい。

Erikson[4)]によると，自我同一性とは「自我が確実な集団の中での未来に向かって有効な歩みを学ぶ途上にあるという確信」，「自我が特定の社会的現実の枠組みの中で定義されている自我へと発達し

＊　関西国際大学人間学部

つつあるという確信」の感覚である。Erikson 自身が，自我同一性のことを，主観的な体験，力動心理学的な事実，集団心理学的な現象，臨床心理学的に解明が必要な対象，というように，多様な次元に関わる概念として様々なアプローチを試みている。自己投入とは，自我同一性が形成される過程で生じる心の動きであるが，自分を含む社会的集団，社会的現実の中で自己投入を行うということを抜きにしては，自我同一性の形成ということはありえない。そのため，Marcia は，「自己投入」という概念を，自我同一性の獲得の測定の際に導入したのである。しかし，自我同一性地位判定尺度における「現在の自己投入」と「将来の自己投入の希求」を測定する質問項目では，所属集団や社会的現実における自己投入をいかに行っているかということがそれほど強調されていない。そこで，自己投入について測定するために，自己投入のより社会的側面を強調する項目を付加することが必要であると考えられる。

本研究では，自己投入に関して測定する尺度を作成し，その信頼性，妥当性を検討することを目的とする。そのため，自我同一性地位判定尺度の「現在の自己投入」に関わる項目，「将来の自己投入の希求」に関わる項目を取り上げるとともに，多次元自我同一性尺度（谷 ,2001）[5]における心理社会的同一性次元に関わる項目を参考にして筆者が新たに作成した社会的自己投入に関する項目を加えて，従来の自己投入に社会性を含めた尺度として新たに作成することを試みる。

1．2　自尊感情との関連

本研究では，自己投入に関連する概念として，自尊感情を取り上げる。Erikson は，早期幼児期の母子関係に始まり，徐々に広がってゆく対人ネットワークの中での社会的是認・受容により，自尊感情が育まれ，このような自尊感情が正常な人格発達の基礎になるとしている。藤原[6]は Erikson や Federn の「健康な自己愛」という概念を自尊感情として捉え，自我同一性として自我が統合的・自律的に発達してゆくためには，この自尊感情が必要であるとしている。このように，精神分析的自我心理学の理論において自尊感情は，根源的に，母子関係などの対象関係を通しての受身的対象愛の欲求が満たされる事により育まれるものとして位置付けられる概念であると言える。

青年期以降の自我同一性と自尊感情との関連については，遠藤ら[7]による一連の実証的研究が行われている。一般的に，自尊感情の高い人は，肯定的な自己イメージを持ち，内的にも安定しており，対人関係においても適応的であることが推測されている。本研究のテーマである自己投入は，自我同一性形成のプロセスの中で生じるものであり，必ずしも肯定的自己イメージ，内的安定性，対人的適応性と一致するものではなく，むしろ，それらを希求する動的な心的過程であるといえよう。そのため，自己投入と自尊感情との相関関係は，極めて高いものではないことが予想される。しかし，自尊感情が低下した状態では，自己投入という心の動きも生じにくいことが仮説として考えられるため，中程度の相関関係が予想される。

福富[8]や高木[9]らは，女性における自我同一性地位と自尊感情の関連を検討しており，現在の自己投入が高い早期完了地位の方が，自己投入の低いモラトリアム地位よりも，自尊感情が高く安定している場合があることを指摘している。Schenkel と Marcia[10]も，この問題に関する女性の自我同一性地

位の特徴について，stable-unstable 仮説として取り上げている。従って，自己投入と自尊感情の関連については，女性と男性の場合というように，性差を考慮する必要がある。

そこで，本研究においては，自己投入と自尊感情尺度（山本ら，1982）[11]との関連を分析することによって，尺度の概念的妥当性を検証する。

1．3　青年期から成人期の発達

青年期においては，社会的自立をめぐって危機が生じるが，Erikson はこれを「自我同一性の危機」と名づけた。成人としての社会生活を目前にして，「自分とは何か」「自分にとって生きがいとは何か」という問題に直面するのである。

一方，成人期以降の心理的発達についての研究は，1970 年代以降になって急速に増えてきたもので，青年期以前を対象とした研究よりも比較的最近になってから注目されてきた領域である。自我同一性をめぐる青年期から成人期への発達に関しては，Hart[12]，Kroger ら[13]，岡本[14]などが，自我同一性地位の発達過程について縦断的調査を行っているように，自我同一性地位という観点からの理解が試みられている。また Tesch[15]らは，「経験に対する率直性，開放性」とアイデンティティとの関連を検討している。

Erikson によると，青年期の発達課題が「自我同一性　対　自我同一性の拡散」であるのに対し，成人期以降における発達課題は，「親密性　対　孤立」「生殖性　対　停滞」になる。Erikson はまた，成人期における基本的徳目として，「愛」や「世話」ということを挙げている。Levinson[16]は，成人期の心理的発達のテーマの一つとして「愛着と分離」ということを挙げている。

このように，青年期においては，自我同一性をめぐる自己形成が中心的なテーマとなるのに対し，成人期においては，青年期において形成された自己が，いかに他者（配偶者等の異性や自分の子供を含む家族，下の世代の育成）と関わるかがテーマになると考えられる。また，前述の Tesch らの研究のように，成人期においては，成人としての社会的経験に対する態度ということも重要なテーマであると考えられる。本研究においては，家族との関わりという経験に着目して，青年期から成人期の発達の問題を検討する。

家族という観点から自我同一性との関連を検討した研究としては，①親との関係や親の生活態度との関連の研究，②家族のシステム機能や相互作用のスタイルとの関連の研究，③「親であること」との関連の研究，などがある[17]。①と②の種類の研究は，主に青年期を対象としており，③については，主として成人期で親としての経験を有している人を調査対象としている。日本においては，①の青年期を対象とした研究が中心である。これらの研究のあり方としては，青年期を対象とした研究，成人期を対象とした研究というように両者を分離した形で調査を行うことが多かったと言える。青年期は，家族との関係においては，「子供としての立場」にある者として，成人期は，「親としての立場」かあるいは「配偶者としての立場」にある者として調査対象に設定されている。結婚し，家族を形成するということは，客観的な現実の経験であると同時に，主観的にも重要な心理的現実の経験であることが想定されるので，青年期と成人期の比較によりその心理的な意味を明らかにするというアプローチ

が必要である。

荒井[18]は，青年期の自己投入と親を含む重要な他者への準拠のあり方の関連を検討しており，大学生において，親への準拠と，自己投入の間に負の相関が認められた。青年期後期にある大学生にあっては，心理的に，親を含む家族の問題から離れた次元で，同一性形成のための自己投入がなされるということが考えられる。一方，成人期にあって家族を形成することになると，妻あるいは夫としての同一性や母あるいは父としての同一性を新たに身につけることになり，家族の問題が自己投入に影響をより大きく与えることが予想される。

そこで，本研究では，青年期と成人期における家族をめぐる葛藤の所在，という点から家族の問題にアプローチし，それが自己投入のあり方といかに関わるかということを探索的に検討する。

2．方　法

調査時期：2003年8月～2004年10月

調査対象：既婚の成人期の対象者として兵庫県A市住民で女性50名(平均年齢：49.2歳，範囲：34～63歳，標準偏差8.35)，内訳は，専業主婦23名，パート・アルバイト18名，公務員4名，会社員3名，自営業3名，その他4名。男性21名(平均年齢：50.3歳，範囲：29～63歳，標準偏差10.29)で，内訳は，会社員10名，公務員4名，自営業2名，その他6名。A市の住民基本台帳と住民地図よりサンプリングし，郵送法等により依頼した。

未婚の青年期の対象者としては，兵庫県にある私立大学大学生と，上記のA市住民よりサンプリングした。女性42名（平均年齢：19.8歳，範囲：14～27歳，標準偏差2.37）で，内訳は，学生26名，パート・アルバイト15名，公務員1名。男性68名(平均年齢：20.2歳，範囲：15～33歳，標準偏差2.27）で，内訳は，学生66名，会社員2名。大学生については，講義の時間を利用して集団法により回答を求めた。

調査項目：①自己投入尺度に関わる項目：自我同一性地位判定尺度より「現在の自己投入」の下位尺度項目4項目，「将来の自己投入の希求」の下位尺度項目に関わる項目4項目，多次元自我同一性尺度の心理社会的同一性次元に関わる項目を参考に，筆者が新たに作成した社会的役割への自己投入に関わる項目6項目の計14項目とした。加藤の原法では，6件法で得点化されていたが，今回は，新たに自己投入尺度として項目分析を行うために，これらの項目に関し「あてはまる（5点）」～「あてはまらない（1点）」の5件法で回答を求めた。

②自尊感情尺度：山本ら（1982）による10項目の尺度。5件法で回答を求めた。

③家族をめぐる葛藤の認知：次の3項目を筆者が新たに作成した。

(a) 家族を構成するメンバーが抱えている葛藤に関する認知を表す項目…「現在，あなた以外の家族の人が，困っていたり，つらい状況にある」

(b) 家族との関係における葛藤に関する認知を表す項目…「現在，あなた自身が，家族との関係で困っていたり，つらい状況にある」

(c) 家族に関わらない問題における葛藤に関する認知を表す項目…「現在，家族とは関係のないことで，あなた自身が，困っていたり，つらい状況にある」

これらは，家族をめぐる葛藤の認知を捉えようとするものであるが，家族との関係そのものも明らかにされることが予想される。いずれも５件法による回答を求めた。

3．結　　果

3．1　自己投入尺度の項目分析

自己投入に関する項目分析のために，I－T 相関分析を行ったところ，「私は，環境に応じて，何をすることになっても特にかまわない」については，相関係数が .22 となったため削除した。その結果，13 項目のI－T 相関係数は，.39 ～ .68 となった。また，13 項目のα係数は .79 となり，自己投入尺度の信頼性が確認された。

「現在の自己投入」，「将来の自己投入の希求」，「社会的自己投入」の下位項目について，因子分析（主因子法，プロマックス回転）を行い，固有値の変化と因子の解釈のしやすさから，３因子を抽出した。「自分は，社会の中で役に立っていると思う」の項目は，どの因子にも高い負荷量を示さなかったので，除外した上で改めて因子分析を行った（表１）。

その結果，第１因子には，「私には，特にうちこむものはない」（逆転項目），「私は今，自分の目標をなしとげるために努力している」，「私は，『こんなことがしたい』という確かなイメージを持っていない」（逆転項目），「私は，自分がどんな人間で，何を望み行おうとしているのかを知っている」の項目が .49 以上の負荷量を示したので，「現在の自己投入」因子と命名された。

第２因子には，「私は，自分がどういう人間であり，何をしようとしているかを今いくつかの選択

表１　自己投入尺度 12 項目の promax 回転後の因子負荷量（N = 181）

項目内容	F1	F2	F3	共通性
・私には，特にうちこむものはない。	.77	－.19	－.04	.49
・私は今，自分の目標をなしとげるために努力している。	.71	.13	－.03	.55
・私は，『こんなことがしたい』という確かなイメージを持っていない。	.64	.02	.06	.46
・私は，自分がどんな人間で，何を望み行おうとしているのかを知っている。	.49	.17	.20	.49
・私は，自分がどういう人間であり，何をしようとしているかを今いくつかの選択をくらべながら真剣に考えている。	－.01	.83	－.20	.68
・私は，一生けんめいにうちこめるものを積極的に探し求めている。	.07	.71	－.12	.52
・社会の中で，自分はどう生きてゆけばよいかということをよく考える。	－.03	.57	.18	.37
・自分の本当の能力を生かせる場所は，社会にはないような気がする。	－.03	－.02	.66	.41
・自分らしく生きることは，現実の社会では難しいと思う。	.05	－.14	.54	.32
・私には，自分がこの人生で何か意味あることができるとは思えない。	.14	－.11	.51	.35
・今後，社会の中で人の役に立つようなことがしたい。	－.16	.37	.43	.28
・現実の社会の中で，自分の可能性を十分に実現できると思う。	.17	.19	.35	.30
固　有　値	3.71	2.02	1.13	
寄　与　率	30.9	16.8	9.4	
累積寄与率	30.9	47.7	57.1	

をくらべながら真剣に考えている」，「私は，一生けんめいにうちこめるものを積極的に探し求めている」，「社会の中で，自分はどう生きてゆけばよいかということをよく考える」の項目が，.57 以上の負荷量をしめしたので，「将来の自己投入の希求」因子と命名された。

第３因子は，「自分の本当の能力を生かせる場所は，社会にはないような気がする」（逆転項目），「自分らしく生きることは，現実の社会では難しいと思う」（逆転項目），「今後，社会の中で人の役に立つようなことがしたい」，「私には，自分がこの人生で何か意味あることができるとは思えない」（逆転項目），「今後，社会の中で人の役に立つようなことがしたい」，「現実の社会の中で，自分の可能性を十分に実現できると思う」の５項目にそれぞれ .35 以上の負荷量を示したので，「社会的自己投入」因子と命名された。

各因子得点間の相関係数を表２に示す。「現在の自己投入」と「社会的自己投入」の相関係数は $r = .61$，「現在の自己投入」と「将来の自己投入の希求」の相関係数は $r = .32$ であるのに対し，「社会的自己投入」と「将来の自己投入の希求」間の相関係数は $r = .17$ であり，比較的低い相関関係であることが確認された。

それぞれの因子に高い負荷を示した項目を下位尺度項目として，それらの α 係数を算出したところ，「現在の自己投入」尺度は $\alpha = .77$，「将来の自己投入の希求」尺度は $\alpha = .73$，「社会的自己投入」尺度は $\alpha = .65$ であった。従ってそれぞれの下位尺度項目の得点の合計を下位尺度得点とした。

表２　自己投入尺度の因子得点の相関係数

要　　因	現在の自己投入	将来の自己投入の希求
将来の自己投入の希求	.32	
社会的自己投入	.61	.17

３．２　自己投入尺度と自尊感情尺度の相関

自尊感情尺度について，１次元性を確認するための主成分分析を行った所，「もっと自分自身を尊

表３　自尊感情尺度 10 項目の主成分分析　(N = 181)

項目内容	主成分	共通性
・何かにつけて，自分は役に立たない人間だと思う。	.85	.71
・自分は，全くだめな人間だと思うことがある。	.80	.64
・自分には，自慢できるところがあまりない。	.76	.58
・物事を人並みには，うまくやれる。	.71	.50
・（自分は）色々なよい素質を持っている。	.68	.46
・自分に対して肯定的である。	.67	.44
・だいたいにおいて，自分に満足している。	.62	.39
・敗北者だと思うことがよくある。	.58	.33
・（自分は）少なくとも人並みには，価値のある人間である。	.56	.32
・もっと自分自身を尊敬できるようになりたい。	.29	.09
固有値	4.46	
寄与率	44.6	

敬できるようになりたい」というについては主成分の値が .30 未満であったため，その項目を除外し，それ以外の９項目の得点の合計を自尊感情得点とした（表 3)。

自己投入尺度得点および，３つの下位尺度得点と自尊感情得点の相関分析を行った(表４)。自尊感情得点と有意な相関が見られたのは，自己投入得点(r = .38 p < .001)「現在の自己投入」(r = .38 p < .001)，「社会的自己投入」(r = .40 p < .001)であった。

表４　自尊感情尺度と自己投入尺度の相関係数

要　因	自尊感情
自己投入	.38 ***
現在の自己投入	.38 ***
将来の自己投入の希求	- .06
社会的自己投入	.40 ***

***p < .001

また男女別に，同様の相関分析を行ったところ（表５），自尊感情得点と自己投入得点の相関係数は女性が r = .53（p < .001）であるのに対し，男性は r = .22（p < .05）であった。また，「現在の自己投入」は女性が r = .45(p < .001)，男性が r = .31(p < .01)，「社会的自己投入」は女性が r = .51（p < .001)，男性が r = .30（p < .01）という結果であった。

表５　男女別の自尊感情尺度と自己投入尺度の相関係数

要因	自尊感情	
	女性	男性
自己投入	.53 ***	.22 *
現在の自己投入	.45 ***	.31 **
将来の自己投入の希求	.09	- .20
社会的自己投入	.51 ***	.30 **

***p < .001　**p < .01　*p < .05

３．３　発達段階および，家族をめぐる葛藤の所在の認知との関連

自己投入尺度得点，自尊感情得点について，発達段階別に平均値と標準偏差を示す（表６)。

自己投入得点と自尊感情得点の発達段階による差を検討するため，ｔ検定を実施したところ，自尊感情得点については，未婚の青年期群の方が有意に得点が低かった(t = 5.24　df = 180　p < .001)。

家族をめぐる葛藤の認知｛家族を構成するメンバーが抱えている葛藤に関する認知（以下，「メンバー葛藤」と記す)，家族との関係における葛藤に関する認知（以下，「関係葛藤」と記す)，家族に関わらない問題における葛藤に関する認知（以下，「自己葛藤」と記す)｝の項目に対する回答｛「あてはまらない」（１点）～「あてはまる」（５点)｝の，発達段階別の人数を表７に示す。発達段階による差を検討するため，χ２乗検定を行ったところ，メンバー葛藤と自己葛藤に関して，有意な群間

表６　世代別の自己投入尺度得点と自尊感情得点の平均値（標準偏差）

	成人群	青年群	T 値
自己投入	45.5 (9.64)	46.1 (9.27)	- .42
自尊感情	32.8 (5.86)	27.6 (7.74)	5.24 ***

*** p < .001

表７　家族をめぐる葛藤の認知の項目に対する回答人数（発達段階別）

		1	2	3	4	5	χ２乗値
メンバー葛藤	成人群	32	13	12	12	5	19.8 **
	青年群	18	14	26	29	20	
関係葛藤	成人群	46	8	11	6	3	8.52
	青年群	46	18	17	12	14	
自己葛藤	成人群	39	9	11	12	4	19.9 **
	青年群	29	5	25	29	19	

**p＜.01

差が認められた（χ^2＝19.8　df＝4；χ^2＝19.9　df＝4）。また，各セルの残差を分析したところ，メンバー葛藤，自己葛藤とも，「あてはまらない」（1）の回答人数で，成人群が青年群よりも多く，「ややあてはまる」（4）と「あてはまる」（5）の回答人数で青年群が成人群よりも多い傾向が認められた。

自己投入と自尊感情が，家族をめぐる葛藤の所在とどう関連するかということを検討するため，発達段階別に，Spearman の順位相関係数を算出して分析を行った（表８，表９）。その結果，成人群

表８　家族をめぐる葛藤の認知と自尊感情・自己投入の Spearman 相関係数（成人群）

	自己投入	自尊感情
メンバー葛藤	.01	-.13
関係葛藤	-.07	-.22
自己葛藤	-.03	-.10

表９　家族をめぐる葛藤の認知と自尊感情・自己投入の Spearman 相関係数（青年群）

	自己投入	自尊感情
メンバー葛藤	-.03	-.14
関係葛藤	-.09	-.26 **
自己葛藤	-.01	-.20 *

** p<.01　* p<.05

では，有意な相関関係は認められなかったが，青年群では，自尊感情得点に関して，関係葛藤，自己葛藤との有意な負の相関が認められた（ρ＝-.23　p＜.01；ρ＝-.20　p＜.05）。

４．考　　察

４．１　自己投入尺度について

自己投入は，もともと自我同一性地位判定尺度に含まれていた概念であるが，本研究では，そのうちの「現在の自己投入」「将来の自己投入の希求」に加え，「社会的自己投入」に関わる下位項目を合わせて，自己投入尺度として新たに作成し，その概念構造の検討を行った。その結果，「現在の自己投入」と「社会的自己投入」の相関係数が r＝.51 と高く，次に，「現在の自己投入」と「将来の自己投入の希求」の相関係数の r＝.32 となり，「将来の自己投入の希求」と「社会的自己投入」の相関は，r＝.17 と低めの相関であることが明らかになった。３次元とも，自己投入という次元に属しているものの，「将来の自己投入の希求」と「社会的自己投入」の関連はやや弱いということになる。「将来の自己投入の希求」とは，自我同一性地位における，モラトリアム地位に関わる概念であり，

モラトリアム地位（或いはモラトリアム状態）においては，社会性との関わりが弱いということを示唆している可能性がある。その一方，自我同一性地位に関わる「現在の自己投入」が高ければ，社会性の高さにも繋がりやすいと考えられる。

4．2　自己投入と自尊感情の関連について

自己投入尺度得点および，３つの下位尺度得点と自尊感情得点の相関分析を行った結果，自尊感情得点と有意な相関が見られたのは，自己投入尺度得点と，下位尺度の「現在の自己投入」，「社会的自己投入」でいずれも，中程度の相関関係であった。そのため，仮説の通りの結果であると考えられる。また「将来の自己投入の希求」に関しては無相関に近かったが，これは，将来において自己投入をしようという意志は，自尊感情とは関わりなく持つことができることを意味していると考えられる。その一方で，現在何かに打ち込もうとする時には，ある程度の自尊感情を伴うことになる。

自尊感情得点と自己投入得点の相関は，全体的に女性の方が男性よりもやや高い傾向が認められた。この結果は，Marcia，福富，高木などの先行研究の通りで，女性においては，自己投入を行っている状態において，自尊感情が高くなり，安定するという傾向が男性よりも顕著であることが，今回の質問紙調査においても実証されたと言えよう。有意な相関ではないが，男性においては，「将来の自己投入の希求」は，自尊感情と負の相関の傾向が見られた。これは，男性においては，自尊感情が低く不安定な状態のときに，将来への希望を託すという態度が表れる傾向があることを意味している可能性がある。男性における将来の自己投入の希求の特徴として今後，さらに検討を行う必要がある点である。

4．3　自己投入と家族をめぐる葛藤について

自己投入得点と自尊感情得点の発達段階による差に関して，自尊感情得点については，未婚の青年群の方が有意に得点が低かったが，自己投入得点については有意な差が認められなかった。青年期と成人期を比較した研究[19]では，青年期においては成人期よりも，不安定な自己イメージを持つ傾向が見られることがあり，今回も同様の結果であるといえる。ただし，サンプリングの問題があるため，一般的傾向として確認するためにはより大規模な調査が必要であろう。

本研究では，自我同一性形成において重要な意味を持つものとしての自己投入を位置付けているが，自己投入に関しては，青年期と成人期で差が見られなかったので，各時期における自己投入の特徴的なあり方を捉えることができなかった。Waterman[20]は，「早期完了型と自我同一性達成型は，共通して自己投入をともなっているが，それぞれのタイプの自己投入の安定性は，さまざまなライフイベントに影響されているかもしれない」と述べている。また，同じく，青年期以降の自我同一性地位をめぐる縦断的変化についての研究で「研究当初に安定した自己投入をもった事例のうち，ほぼ３分の１から半数が，追跡されたときまでに別の地位に移行したことが明らかになった。自我同一性達成地位におけるこの結果から，自我同一性危機の良好な解決は，永続的な自己投入を意味するものではな

いことが明らかである」としている。このように，自己投入とは，必ずしも青年期以降には安定するものではなく，本研究の結果からも，成人期においても青年期のあり方とそれほど変わらないということが考えられる。

家族をめぐる葛藤の認知に関しても，発達段階による差を検討したが，メンバー葛藤と自己葛藤において，青年群の方が成人群よりも葛藤を認知する割合が高かった。これは，家族のメンバーや自分自身についての葛藤について，今回の調査の青年群の方がより敏感である，または意識的である，または開示的であるなどの解釈ができる。ただ，この点について，一般的傾向として捉えるためには，今後も検証してゆく必要がある。

自己投入と自尊感情が，家族をめぐる葛藤の認知とどう関連するかということについて，成人群，青年群別に分析を行ったが，成人群では，自尊感情，自己投入ともに葛藤の認知との有意な相関が認められなかった。従って，成人期における家族をめぐる葛藤は，自己投入や自尊感情により関わるであろうという，本研究における仮説は支持されなかった。家族の問題であれ，自己の問題であれ，葛藤を持っていることが，自尊感情や自己投入のあり方に影響しないということが，成人期における特徴として考えられる。葛藤を持つことを受容しやすくなるのが，成人期の段階であるという考え方も可能である。

一方，青年群においては，家族と自己の関係における葛藤の認知と，家族の問題以外の自己の葛藤の認知は，自尊感情の低さと関わっていることが明らかとなった。成人期において，両者が無相関であったことと対照的な結果である。青年期には，自己に関わる葛藤が，より直接的に自尊感情に関係しているということが言えよう。このことは，青年期における自己の不安定さを表していると考えられる。

4．4　まとめと今後の課題

本研究により，自己投入尺度が作成され，その構成概念について検討を行うことができた。また，自己投入と自尊感情の関連の仕方における男女の特徴についても明らかとなった。一方，青年期から成人期にかけての発達的特徴に関しては，自己投入や，家族をめぐる葛藤の認知という点から，充分に検証できたとは言い難い。

成人期の自我同一性形成，また自己投入には，結婚や家族との生活ということも大きく関わっていると考えられる。従って，今後の課題として，成人期における発達的特徴を捉えるために，家族の問題という側面からアプローチするのであれば，家族と自己との関係や，家族との生活に関わる意識をより細かに検討してゆくことが必要であろう。

引用文献

1）Marcia, J.E：“Developmental and Validation of Ego－Identity Status” Journal of Personality and Social Psychology，Vol.3，1966，pp.551－558

2）加藤厚：「大学生における同一性の諸相とその構造」『教育心理学研究』31巻　1983　292－302頁

3）荒井真太郎：「大学生における自己，親，友人，好きな異性への準拠のあり方について」『家族心理学研究』15巻　2001　93－107頁

4）Erikson，E.H.：“Identity”：Youth and Crisis. New York：Norton.（岩瀬康理訳　1973『アイデンティティ』金沢文庫）

5）谷冬彦：「青年期における同一性感覚の構造」『教育心理学研究』49巻　2001　265－273頁

6）藤原正博：「自我同一性と自尊感情の関係」遠藤辰夫（編）『アイデンティティの心理学』第7章　1981　85－89頁

7）遠藤辰雄・安藤延男・冷川昭子・井上祥治：「Self－Esteemの研究」『九州大学教育学部紀要』1974　53－65頁

8）福富護：「同一性地位に関する実証的研究（Ⅱ）―女子大学生における自尊感情との関連―」『東京学芸大学紀要第1部門』35号　1984　137－147頁

9）高木秀明・福森裕子・小沢一仁：「女子大学生の自我同一性　―対人関係，生き方，自尊感情の面からの検討―」『教育心理学会第28回大会論文集』1986　342－343頁

10）Schenkel,S. & Marcia,J.E.：“Attitudes toward Premarital Intercourse in Determining Ego Identity Status in College Women.” Journal of Personality, Vol.40, 1972, pp.472－482

11）山本真理子・松井豊・山成由紀子：「認知された自己の諸側面の構造」『教育心理学研究』30巻　1982　64－68頁

12）Hart, B.L.：“Longitudinal Study of Women's Identity Status” Dissertation Abstracts International, Vol.50,1990, p.4807

13）Kroger,J. & Haslett,S.J.：“A Comparison of Ego Identity Status Transition Pathways and Change Rates Across Five Identity Domains” International Journal of Aging and Human Development, Vol.32, 1991,pp.303－330

14）岡本祐子：「成人期における自我同一性ステイタスの発達経路の分析」『教育心理学研究』34巻　352－358頁

15）Tesch, S.A. &Cameron, K.A.：“Openness to Experience and Development of Adult Identity.” Journal of Personality, Vol.55, 1987, pp.615－630

16）Levinson,D.J.：“The Seasons of Man's Life”：W.W.Norton.（南博訳　1980『人生の四季』講談社）

17）鑪幹八郎・宮下一博・岡本裕子（編）：『アイデンティティ研究の展望Ⅳ』ナカニシヤ出版　1997　147－181頁

18）前掲書3）

19）荒井真太郎：「青年期から成人期にかけての執着的態度と退却的態度の関係について」『関西国際大学研究紀要』3号　2002　69－80頁

20）Waterman,A.S：“Identity Development from Adolescence to Adulthood：An Extension of Theory and a Review of Research.” Developmental Psychology, Vol.18, 1982, pp.341－368

Abstract

The purpose of this study is to construct Commitment Scale and to examine the construct validity by analyzing the relation with self - esteem, and the development from adolescence to adulthood. Commitment Scale, Self - Esteem Scale and the questionnaire about the distress over the problems of one's family life were administered to 110 adolescents and 71 adults. The main results were as follows; (1) the correlation between commitment and self - esteem was significant and the characteristics in men and women were shown in that analysis. (2) In adolescence the self - esteem was related to the distress over the problem of family, but in adults there was no significant relation between them.